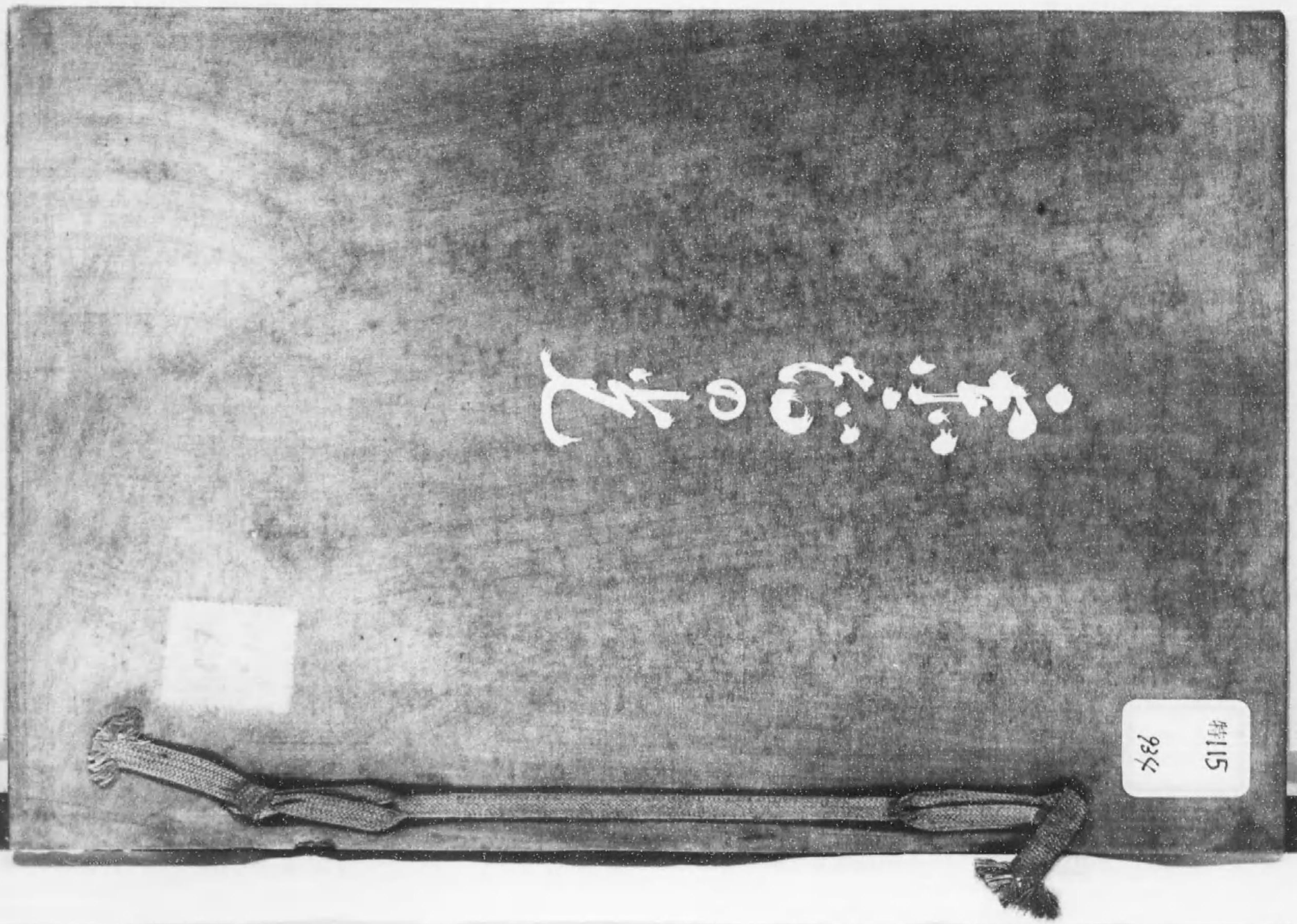

特115
93ス

特115
934

宗教の光

序篇

親愛なる世の人々のために

薫美

人皆眠れる

すさまじき暗の世である、
世を擧げて垂れこめし暗の帳は
悶はしく一重と張り
惱ましく二重と覆ひ三重と包んで
世はさながらの如法暗夜である、
眼に映つるは烏羽玉の
暗より外に何物もない、
前後左右縱横上下
一切隈なく暗である、

あやめも分かぬ眞の暗である。

うたておぐらき暗に潜んで
暗より暗に擴ごるは
魔の囁である、
魔の差し聲は
『暗よ光を遮ぎれ
人よ睡眠に落ちよ』
と呼びどよむ、
甘く柔き魔のいぶきに

哀れ人は
天眞の眼を閉ぢる、
閉ぢた眼瞼に暗は迫る、
斯くて人は
皆深き睡眠にと落ちる、
永き長き果てもなき睡眠である、
いつを限りともなき睡眠である。

無始よりこのかた
時の翼は

その羽搏きの音もなく
天翔り
空翔り
過ぎ行く際に
あはれ人は
唯深い深い睡眠にと落ちて
人の世の現世は
何時の世も
何時の代も
唯闇黒の暗と續いた、

一年三百六十五日
晦朔四萬三千二百分。

廻り廻りて
しばしも止まぬ天地の間に
一實の光は日と輝き
眞如の影は月と照るが
人の眼は開かうともせぬ、
閉ぢた眼瞼に微動もない、
眠れるまゝに時は移りて

暗はそのまゝ未來に續く、
かくて人の世の永劫は
あゝかくて
眼前眼後唯暗であるのか、
眠れるまゝの暗であるのか。

暗とは何
睡眠とは何
そもまた暗よ睡眠よ
何れに來り何れに去るか、

そはげに
來るにあらず
去るにあらず
たゞ眠れるが故の暗である、
たゞ醒めざるが故の睡眠である、
げにそは
醒めざる前の睡眠である、
睡眠の後の暗である、
暗を照すは光である、
光に覺むべき睡眠である、

醒むれば四邊に暗は無い、
光はもとより暗を許さぬ、
覺むるが即ち光である。

三寸の莖一枝の花
光もとめて野には咲く、
草におく露葉末の雫
宿すは同じ光である、
生きとし生ける一切に
光を仰がぬものとてはない、

光をもとめ光に笑むは
自然のなせるさだめである、
さるを人のみはいかなればかく
光にそむき暗に向ふぞ、
暗にまよひ睡眠に落つるは
それとさだまる
人の性では決してない、
たゞ暗を光と
誤り見るがためである、
睡眠を現と

思ひ惑ふが故である、
暗の現を
光の現と
思ひ慣るゝが故である。

光を厭ふて
暗を誘ふ魔の詭計は
睡眠の裡にそと夢を浮べる、
夢は
無頼の無明を畫き
隱謀豫圖の蜃樓を匠み
獸を拜む妄臺を築く、
苦樂の山河
生死の野邊
ひたすらに現と見て
迷ひ惑ふは黄粱幾炊
そは悉く夢である。

夢の世界

慾の世界

幻の世界
動物の世界
彫刻の世界
こはげに悲惨の世界であるよ、
見よ
蔓根敷く蓬が庭の蟻の塔か
絲蔓茂る松が枝の蜂の巣とも見ゆる
あれが
夢の世界の魔の都である、
かしこに

そしてかしこのまはりに
彫刻と動物
幻と慾
善人と悪人とが
配列し運動して、
おそろしき妄念が起す激動の
むかつかせる不協和の擾音も
蓬生嵐松風となれて
哀れ慾の世界の人の耳は
天來の解決を聞くには

餘りにとほすぎる。

苦は
神々の徽章である、
忍耐は
神々の素質である、
苦は
人の神化す特權である、
であるのに
夢の世界の夢の人は
この特權を放棄するに夢中である、
『如何にせば
人富ますして吾富むべきか、
如何にせば
律法の個條々々に觸れずして
租稅を脫すべきか、
國家の盛衰は時運である、
百事定命がある、
吾等如何ともすべからず、
先づ以て如何にせば最善の

寄生寄食者たり得るか、
不行蹟は
下を察するの手方である、
上に迎合するの手段である、
智識は
人格者たるの所以である、
そも吾等何の爲に忠孝の要ありや、
吾は神を怖れず
營養不良唯これ恐る』と、
その然るにもかゝはらず

敎ふる人は懇々諄々
句讀の聲は天々旺々。
子のたまはく、
政をなすに
德を以てすれば、
たとへば北辰の
その所に居て、
衆星のこれに
むかふが如し。
子のたまはく、

これをみちびくに
政を以てし、
これをとゝのふるに
刑を以てすれば、
民まぬかれて
恥づることなし。
これをみちびくに
德を以てし、
これをとゝのふるに
禮を以てすれば、
恥ありて
且つたゞし。

夢の世界に並ぶ四角の箱の中に
人は生れて人は死ぬ、
見よ人は
死ぬために生れるといふ事業、
永き葬儀に
疲れ果てゝ居る、
僧家は之を讃じて謠ふ、

人間僅に五十年
花に譬へて朝顔の
露より脆き身を持ちて
なせに後生を願はぬぞ
假へ浮世に永らへて
樂しむ心にまかすとも
老も若きも妻も子も
遲れ先立つ世の儚ひ
花も楓も一盛り
思へば吾等も一盛り

十や十五の蕾花
十九や二十の花盛り
世帶盛りの人々も
今宵枕をかたむけて
直に頓死をするもあり
旦に笑ひし幼な子も
暮に煙と成るもあり
哀れ果敢なき人々よ
浮世は日に日に遠ざかり
死は年々に近づきて

今日は他人の葬禮し
明日はわが身の葬禮す。

生と死、
莊嚴なる矛盾、
この莊嚴なる矛盾をしも
契り合せて人の面目はある、
眞生命はこれより始まる、
生と死、
善と惡、

時間と空間、
道德と慾望、
この矛盾を一致せしむるが
地上に於ける人の試練なのである、
酸素水素も
分離のまゝでは
取扱ふに困じるであらう、
水こそ便利なものである、
中和と化合は
自然の自ら然る所以である、

勿論中和の熱はある、
勿論化合の熱はある、
がそは覺醒の前表である、
眞理なる神の約束に感動されて
世界を化して一家庭、
この大勇猛心が起らなければ
生死一如とえなれぬ、
何も知らない子供のやうに
嬉しがつて殉教者とならなければ、
白及をわたる蟻のこゝろとならなければ、

眞生命は始まらぬ。

げに人は
その生活の一切を擧げて
他人のために盡す間、
社會のために
國家のために
世界のために
自己の快樂を犧牲にして
働く間が

安心であり立命である、
これこそ
そしてこれのみが
完き心の歡喜であり
完き自己の救ひである。

それ天の意は
地の平和である、
人の和合である、
自他の完全調和である、

最高の美である、
莊嚴である、
家庭を化して一個人、
社會を化して一家庭、
世界を化して一國家、
宇宙を化して一世界、
これが神のみこゝろである、
永劫不變の眞理である、
これまどはしき人生の
行旅を照らす不滅の光、

このみこゝろを心として
このみ光を凝視して
行法護法の絶對に住して
外界に臨むその時に
人は正しく生死を超えて
刹那々々に歡喜ばかりの
眞生命に入るのである。

それ世界は
革命や

牢獄や
示威や
戰爭や
離婚や
結社や
迫害の
威嚇なくとも
生命から
迸り出る正義と愛の
白熱の火焰を吹きかくれば

惡も變じて善となる、
善といふも
惡といふも
結局一つの力である、
酸であれ
はた反性の鹽基であれ
熾炎をさへ與ふれば
鐵なほ斷つべき精刀の
いと强靭の親和力となる、
かく矛盾せる両極を
一致せしめて取扱ふ
賢人となれ偉人となれ、
そのものゝみが世界を美化する、
そのものをこそ實に眞に
數億萬の人といふ、
千手萬手の神といふ。

世界を飾る
文化の華や敎化の花を
過去幾億萬人の

營々克苦働いた
力の結晶であるといひ、
社會も國家もはた世界も
無始以來
生れては死に死んでは生れた
無數の過去の人類の
連續せる力の成果であると、
歴史的表現を一概に
萬人の創出的才能に歸し
時間的延長のやうに考へて

徒らに個人の權利をのみ主張し、
法華と咲き聖果と結んだひじり等や
雷鬼を捕へ水神を驅使した天才等、
これ等少數者の力を否認するは
まだ智性の神秘に及ばない、
生命の琴線に觸れてはをらぬ、
勿論文化を築くためには
勿論敎化を敷くためには
心や肉の
數限りない勞働者が

努力を寄進するのではあるが、
そは咲き競ふ八重櫻、
生命の要素たる實の
穣々さを示すものではない。

夫れ文化といふも教化といふも
實を結ぶものゝ尊しとする絢爛の花で
然らざるものには
その價値うすきものである、
國家存立の理由とする
獨立確保も
文明の貢獻も
國民をして
實を結ばせねば何にもならぬ、
世界の眼となる
賢者を生まねば何にもならぬ、
實を結ばする人となれ、
それには
先づ自らが實を結べ、
先づ生命の要素となれ、

山ふところの岩間に生へ出づる
名なし草すら
理智の機巧をこらし盡して
自家の天地にいみじくも
花を咲かせて實を結ぶ、
生命の要素となるではないか。

花は蕾の中の
實のために存在する、
嬰兒を抱ける人の母は
そも誰のために存在する、
若し夫れ
いとしきものゝ
夢に天樂をきいて嚮笑むこともあれば、
人の母は刹那に
自己を否定するではないか、
母のために子が存在するのではない、
子のために母が存在するのだ、
その認識は母の心曲に
眞と善と美とを押しすゝめたものゝ

實在を示すものでなくて何である、
鬼神も避くる
天才の背後にあるもの
狂ふて叫ぶ
宗祖の背後にあるものは
炎暑の十里を醫者に駈けさす
惡知らぬ
愛しき清き
獨り子なのである、
求むるものは

極めて近い所に居る、
人はかうした敏感な
種族の部に入らねばならぬ、
過去文明の創造は
現存する自己にのぞむ
實在のためにのみ存在する。

誤り易き幻想はいふ、
國家
戰爭

財産等は
所有慾の、
教育
結婚
宗教等は
創造慾の
政治的體現である、
政治經濟改造の原理は
この所有慾の束縛と
創造慾の解放とにある、

生活のための生活は
動物である、
空虛である、
人生に意義がない、
せめては
神とか眞理とかに奉仕しやう、
孤獨嘲笑は覺悟の上である、
よし現實に生き得なければ
眞理を友に
幻想に生くればよいと、

一應尤ものことではある、
がしかし
當れるが如く當つてをらぬ、
幻想は
放縱の子を生み落して逃げる、
神といふも眞理といふも
決して決して
現實を離れては存在しない、
そを決して
自己以外に
人生以外に求めてはならぬ、
あくまで自己の裡に
實人生の間に求めねばならぬ、
所有も創造も
完全調和の
眞なる美の
獨り子復活の準備である、
その足代と神殿である。
世界改造の原理は

自己の境地の開拓にある、
境地開拓の原理は
生活の根本的改革にある、
生活の根本的改革は
私的生活の全廢である、
その生活の一切をあげて
人類に奉仕するのである、
須く先づ自らを改宗して
自らを救ふ自らの開祖となれ、
それ人自らが宗教である、

人自らが哲學と神學の具現である。
立法權は全國民の
意志の發表である筈なのに
個條を守る者よりは
免れたい者の多きより觀れば
そは全國民の
意志の發表にはあらで
暴行者の手段に過ぎぬと
不平をいふ、

不平は罪惡の子である、
不平をいふ暇に
先づ目の前の
躓く石を除けよ、
下水を堀つて道路を敷け、
病院を建てゝ學校を興せ、
義舍を設けて聖堂を開け、
自奪せよ
それ人自らが立法である。

夫れ人は
神の思想の徵證である、
されば人みな
その結果の完全調和に
形體の上に超越して
持つて生れた德性を
眞劍に且つ大膽に
實行するのである、
それ天地のことはりたる
結局一つの美に歸する、

されば人の勞働は
神聖なる美の
表現であらねばならぬ、
美は知識を愚弄する、
美は一切を超越する、
きく人のありとも知らで谷深く
鳴く鶯の聲さへも
猛き勇士の駒をとゞめる、
鄙婦が奏づる一曲の悲歌さへ
鬼神羅刹を泣かしめる、

奴隷を塵外に解放する、
それ美のある所に害はない、
古人はいつた
『人として優美の調曲に
感動され得ないものは
その性必ず信義に背く、
たゞ詐計を
逞しうするに適するのだ』と。

美的對象が美的對象たる所以は

そも何であるか、
美的性質とは
そも如何なるものをいふのであるか、
これまづ最初に解決すべくして
しかも最後迄殘るところの
問題であるといひ、
とりあへずこれを
消極的に規定して
色彩とか
形狀とか

音響とかの如きものと
同じではない、
また感情と沒交渉の
すべての性質や關係ではないといふ、
單語のキには意味はない
クにも意味はない
意味ないキの餘韻と
意味ないクの餘韻とを
交へることによつて
キでないクでない

一つの花を概念するのである、
音樂の天才は
この交りに生きて居るのである、
繪畫の天才も同じく
色彩や線の交りに生きて居るのである、
さてこの
餘韻と餘韻と
色彩と色彩と
線と線とを
交はらせるものは

人の內觀の調和性である、
無始以來
その億劫をやしなはれ來た
美意識である、
主觀的動機ともいふべき
創造的本能である。

人の行道は
この美意識の
餘韻であるべき筈である、

その餘韻と餘韻との交りが
又次の美意識を生む、
その點綴が
人生の觀音樂であり
天府に至る凱歌である、
千代に八千代の
君が代の神曲も、
默示の薫り
希伯來の聖語も、
美人を鼓舞した

ハドソンの流調も、
秀麗玉を映す
韋陀の歌詞も、
飄忽人を嘲ける
超人の獨語も、
瑤姿今に舞ふ
英翁の劇詩も、
三界輪廻した
南歐の聖詩も、
イラン高原

樂土の王書も、
鬼神泣いて去つた
出師の表も、
富人雄猛り狂つた
マルセイユの歌も、
その表現に種々相はあるが
その力量に大小はあるが
その實質に變りはない、
たゞ美はしい必然の約束に向つて
莊嚴なる祭壇を築かねばならぬ

美の兄弟の行進曲である、
世界人類の調歌である。

美の最高の表現は
世界人類の調和である、
人と人が
かたみに自己を否定して
他の苦の中に
歸するは同じ人生の
旅ゆく心の姿を

見出しあふとき
そは何といふ莊嚴であらう、
他の一切の美は
みなこの美の徒弟である、
この究竟に天國はある、
こゝに
五感や情念や
意志や知識を超越する
崇高至美の世界がある、
絶對自由の天地がある、

不死の生命のみ國がある、
この世界に憧憬るゝが
人本來の慾求である、
こは無害の大望である、
人はたゞ〳〵ひたすらに
この慾望のみに生くべきである、
蓋し天眞より發する
この慾求に生くるものは
たゞ本能のまゝに動く
動物や子供と同じやうに

呵責がない筈である、
實行なき思想は呵責である、
天才の子持てる親が
その養育を怠るならば
子は呵責のたねであらうに。

およそ自然に消極はない、
消極は腐敗である、
破壞である、
死である、

進め進め
たゞ疾く進め、
自然はたゞ積極のみである、
若し消極の立場にあることが
必然であらねばならぬとすれば
そは飛躍の羽根の付け替へであれ、
朝起きるための眠りであれ、
より鮮明のための目ばたきであれ、
世救ふための孤獨であれ、
生れるための死でもあれ、

事實は消極も積極もない、
若しありとすれば
そは老人の夢の世界にばかりである。

美は己れを人に化す、
無始よりこのかた
この美意識は
思想の受容器ともいふべき
人の母に臨んでは
そのまゝ天使とも見ゆる

色身の人の子となり
己を體現しやうと
吸收し
試問し
觀察し
訓練し
成人し
所有し
創出し
喜捨し

至高至純の美を憧憬れ慕つて
果てなき愛を
果てなく照らす
常世の樂土をまづ自己に瞻て
そを地上に現出しやうと
こゝまで輪廻轉々して來たことを
人は今こゝで知覺せねばならぬ、
父母の泣いて盡きせぬ悲みは
いとし子の旅死である、
天地の惱みなげかひは
この神の子の魂消れである、
世の憂慮とするところは
この美意識の凋落である、
およそ人生の悲慘といふ悲慘でも
これに超すものは斷じてない。

自己を知れ
自己を知れ
この墜き自己を知れ、
人よ眼醒めて

官能を驅使する
この本然の生命に歸せよ、
限りなき仕事を
蕾の中のこの實に求めよ、
然らば人は永遠に退轉しない、
もしその蕾の花と咲いて
實は實と結ぶことゝなれば
世界はそこに一新されて
のぼる文化のきざはしから
無限の圓界理道をはしる

不死の生命の己れを觀る。

認識は何處迄も
主觀よりせる實在であらねばならぬ、
概念は何處迄も
主觀よりせる實在に歸すべきである、
いみじくも歌へる七重八重
花は咲けども山吹の
實の一つだになきはかなし、
散るをならひの山櫻

實になる花が幾つある、
戀の移調黄薔薇の花、
派手は移り氣ダリアの花、
死は哀悼のサイプレス、
不誠實なるチギタリス、
きまぎれ仙人やまいばら、
誘惑の手マルメロ、
陷策の蟲捕りなでしこ、
技巧ばかりのアカンサス、
酩酊せるか絲蔓に
咲くや五裂の凌霄花、
羈絆は脱げず
創出は出來ず
あだ花ばかりの世の中である、
實を結ぶ花は萬が一もない、
あはれ實は既に
花や蕾の中に殞沒するのである、
美意識の凋落、
盲者の横行、
天國の閉門。

悲痛すべき末法の今の世である、
盲者を手引く開眼は居らぬか、
危險である、
險呑である、
崖があるぞ、
河があるぞ、
獅子が來るぞ、
虎が來るぞ、
今や世界の危機である、

盲者を手引く開眼は居らぬか
慈眼は居らぬか
同情者は居らぬか
盲者は元より眼あきを同情し得ない、
盲者の同情をもとめて居てはならぬ、
眼あきはどし〳〵盲者を手引け。

あゝ人よ
美はしき花よ、
あだ花と散るではない、

まづ自己を救へ、
そして衆生を救へ、
實を結んで
散る一切を救へ、
結實、
一大責任觀、
こは老も若きも男も女も、
冷靜に
謹嚴に
精慮默考して

大覺すべき問題ではないか、
不死永遠の生命を獲得した
その一つの結實は
あだに散つた一切を
救つたことになる。

人一切の行爲はみな
生れぬ先の
この神の子復活のためであらねばならぬ、
これ内部的主觀的道德の標準を

決定するものである、
ゆるぎなき道德の確立である、
世の苦說に從へば
善惡邪正の標準たる、
そは世の時勢
世の時代の
飽く迄賴み難なの甲乙一致である、
さはれその由來を質せば
およそは國家社會の
風習制度に因るのである、

蠻人の善は馘首にあり、
戰國の代は
擊弟斬父また已むことを得ず、
斬捨御免咎むべからず、
金力の代は
買妻賣娘また已むことを得ず、
蓄妾遊山咎むべからず、
善人の善は慈善にあり、
十金を與へたるがために
人紅粉に醉ふて

遂に家を賣る、
また已むことを得ず咎むべからず、
善きも惡しきも咎むれば
皆惡である
罪である、
されど時運の輪轉せば
氣運一變
風習制度も據るに由なく
甲は善とし乙は惡とし
相互に固執不動の姿勢をとらば

聽てそのときこれ如何と、
然るに古往今來
聖者の行や
欲するに從つて而も悖らず、
畢竟意識善の境涯を脱すれば
非意識善の境涯に達すべきかと。

主觀よりせる實在、
生命よりせる生命なるもの、
久遠よりせる久遠なるもの、

こゝろよりせる靈法なるもの、
力よりせる力なるもの、
まことよりせる眞實なるもの、
靈智よりせる靈智なるもの、
善美よりせる善美なるもの、
この美の前には
矛盾せる世の
時間的道德も
空間的財貨も
跪拜せざるを得ぬ。

さるにも唯衣食の計にのみ
唯名利の機會にのみ
われとわが身を消耗し盡すは
よしんばそれが
爲政家にせよ
實業家にせよ
宗教家にせよ
藝術家にせよ
教育家にせよ

これ自らを嬲り殺す
世間第一等の罪惡である、
鋸鉋で
わが子を挽いて削つて
殺すよりもなほ慘酷非道のものである。

げに人の勞働は
神聖なる美の表現であらねばならぬ、
その勞働の苦みは
より崇高の美を
表出しやうとする歡喜が
人に薫る歡喜であらねばならぬ、
世はこの苦の歡喜と
苦しむものゝ爲めに苦しむ歡喜の
歡喜と歡喜の光に滿ちねばならぬ、
天國はこの苦の中にある、
その歡喜の光に
一切の心曲を觀るのである、
丁度人が
一閃の電光に闇の深さを見るやうに、

壹の間の光に事物を見るやうに。

夢より覺めて
睡眠を醒ませ、
暗より出でゝ
眼瞼を開け、
覺むれば
即ち光明世界、
世界は
即ちあめなるみ國。

天隔かる遠き世にすら
史上に傳ふる遠き世にすら

詩
音樂
建築
錦繡
繪畫
調度
花足

謳はんものは住めよかし
畫かんものは張れよかし
疲れしものは聽けよかし
食とるものは盛れかしと
きそへる苦とて輝きに
照りかへつた時もある、
アテネの海紫に
うち寄する新潮の
イデアの光に明けそめて
シナイの山

たなびく雲のほの〳〵と
色美しき永遠の愛に
赤らみそめた時である、
雪山の南
蓮華咲く希連禪の流れも澄みて
寂靜の珠の光の
圓かにも照り渡つた時である、
魯の東邊
若草萠ゆる曲阜の野に
調たえなる樂の音の

そよ吹く南風に蕩じた時である。

神代につゞく
有史このかた宗相のまへ
地上始めて明德の門を聳て
天上自ら究竟の扉を開いて
きらめきわたる神秘の光の
燦爛たるその輝きに
暗の世の暗は蔭をひそめ
人の世の人の睡眠は
さやかにも醒めたのであつた。

がそは遠き世の昔語である、
過去佛の世の語草である、
聖者一たび黄鶴に乘じ
神人再び蒼天に歸れば
聖火漸く光を收め
彩霓紅霞の影は淡れて
やがては移る伽羅の歩みに
世紀の流七と數え

三と倍し
暦數遠く後五と改まる、
經典いつしか祖魂を失ひ
章句は僅に形骸を留むるに過ぎぬ、
眞諦堅く鐵塔の中に藏され
哲理は口舌の空華と亂れる、
學府群がり建てど
科學は偏へに人と遠ざかり、
藝圍並び興れど
技術は益々道と隔たり、

東西歐亞の文明
あはれ群童の朽木に雕り
泥土を刻むと選ぶ所がない、
げに文化行脚の名殘、
げに敎化榮落の跡、
人は落々世は荒寥、
諸行無常はこゝにも漏れぬ、
劫風一過
傳統の光忽ち搖るぎ
法燈山に入り林に隱れて

暗はまたもや次第に迫る、
暗は再び帳を張る、
世はやがて人はやがて
昔ながらの暗にと歸る、
明後の暗
こはまた
すさまじき暗である。

こはげに
末法の今の世である、
闇黒の暗の世である、
あやめも分かぬ暗の世である、
人皆眠れる暗の世である。

が喜べ悲しむな、
暗はいつ迄暗とさだまる暗ではない、
閉ぢし眼瞼の暗である、
我より出でゝ
我にと歸る暗である、
光を蔽へる暗である、

暗に隠れし光である、
我より醒めて
寸と進み尺と歩み
高きに登りて
暗の帳の蔭を出でよ、
くらき地殻を砕きて出でよ、
穢土の地層をのがれて出でよ、
光は常に笑みて輝く、
そはありし世に
聖火と燃えにし光である、

今はた
萬世に亘る光である、
昔も今も
輝く光に變りはない、
唯我と閉ぢたる眼瞼のみの問題である、
古への賢母はその子に言ふ
『汝
短かき劍の前に一歩を進め』と、
明暗僅に刹那の差である。

見よ
頭を擧ぐれば
靜けき夜半の蒼穹に
耿々として星は瞬く、
北斗の影銀河の流
無象に響く有聲を聽かずや、
星と星とは何をか語る、
暗のこの世に輝く星は
昔も今も夢より覺めて
睡眠より醒めて

刹那を渡る聖者の眼である、
天に、瞬く世界の眼である、
星と星とは何をか語る、
地軸は轉じ時運は廻る、
長き夜の
睡眠のうちに待ち佗ぶは
醒むるならひの曉である、
聽け
警醒の鐘の響を、
東はしらめり我ぞ光

おゝ
山河は再び明けんとするのだ、
時が來た
遂に來た、
聖者の時が來た、
人本來の面目を
恢復する時が來た、
今や勇ましき悔恨も
花々しき懺悔も

その人ならば何にもならぬ、
夢の人ならば何にもならぬ、
彼一時此一時
聖者の時に乘じて
暗より出でよ、
暗より出でゝ眼を開け、
そこでまづ
一切の知識を燃やせ、
過去を精査して
未來を整理するのだ、

過去と未來を
合一さすのだ、
眞生命はそれより始まる。

深睡大夢そも〳〵の禍因は
人が神を議したからである、
人が神を論じたからである、
人が神を律したからである、
それが魔の詭計であつたのだ、
およそ知識は

超全天を知覺する
手火の料に外ならぬ。

さるにも
世の知識のさま〴〵には
物如を以て不可知となし
認識の範圍を
時間空間範疇の
關係中に顯現する
現象のみに限定するのもある、

認識の作用は
認知する主觀と
認知せらるゝ時々の對象との結合を
豫想するものとして
獨立せる實在や客觀を
そのまゝに把捉することは
全くに不可能であると
斷ずるのもある、
認識する意識の性質や强弱は
同時に起る他の經驗や
過去の全經驗の影響を蒙むるのだと
論ずるのもある、
しかも
時間と空間とは
意識を制限するのだといひ
あるひは單に
時間と空間とは
思想の形式に過ぎぬといふ、
かくて
人は何時の間と

自己を離れ
自然外に佇んで
相對的自然
代表的自然となりすます、
がそれで
個人が何程修正されるか、
それで世界が
何程平和となるか。

先天的合理普遍性をもつ判斷は

如何して可能であらうかと
我と我が影響の下に
無數の心的勞働者は
聖者法者が
人の不完全のことばを以て
その見性をもらしたのを
則字したり懷疑したり
その認識を論じたりしてゐる。

まづその可能については

何事もなく
これを承認するのもある、
斷乎として
これを承知せないのもある、
とりあへず可能を豫想しておいて
可能であるかを究めるのもある。

起原については
內發的に考へ察して
所謂理性に
基くとするのもある、
單に
經驗より來るとするのもある、
形式的に論究して
認識の合理なるがためには
如何した起原をもつのであるか、
その合理性は
何に基くかを論ずるのもある、

本質については

認識に對應する
認識主觀外の存在を說くのもある、
これを否定して
認識の觀念性を說くのもある。

さてまたこれ等
可能
起原
本質
各部の問題の解釋となれば

相對立せる二原理を認めて
その關係によつて說明するのもある、
萬有の本體を唯一であるとして
この一元から總ての殊別が
出て來るものとするのもある、
獨り個體の實在をのみ認めて
おほよそ普遍的であるものは
唯名のみとするのもある、
物質的の一元を立てゝ
萬有の存在を說明するのもある、

事實を基礎として
現實を解釋するのもある、
一も二もなく經驗に歸して
別に理性や觀念等の
先天的存在は認めないで
おほよそ眞理といはれるものは
經驗を重ね重ねて
歸納的に證されたとするのもある、
これに對して
所謂理性の先天的存在を認めて

その作用によつて
正確の知識を
得るのでもあらうかといふのもある、
ほかに心的の實在を以て
萬有の原理とするのもある、
なほほかに
非意識的現象に敎へられて
主觀的判斷の原理を
得やうとするのもある、
みなその一々に十分の言ひ分はある、

がその何れにもせよ今の世は
盲者がその低級の美意識によつて
莊嚴性を究めんとするもので
これ小猿が人を
生まうとするの暴である、
自己を他人として取扱ひたいといふ。

其の他何論何學何說と
數ふるうちに日も暮れる、
それこそ

黃昏の野に咲く花の暗に泛いて
赤青黃紫綠菫橙と
更に色調を異にする
花と咲き花と散つて
複雜極まる主張をするのである、
またその主張の方法には
白色の心理主義
黑色の論理主義
灰色の心理反心理主義と
さながら星霧の如く

風の如く
雲の如く
私語の如く
暗をさまよふのである。

認識は何處までも
主觀よりせる
實在であらねばならぬ、
必要であらねばならぬ、
自由であつてはならぬ、

天才であらねばならぬ、
說明であつてはならぬ、
概念は何處までも
主觀よりせる實在に歸すべきである、
花は何處までも實に歸すべきである、
爲才才は觀物である、
聖果を結ぶ悟道の花は
不死の生命の要素である、
徒に
世の觀賞物となるべきでない、

いつの世もいつの代も
種々相のなかに彷徨すべきではない、
今といふ今
雜相より純一へ
相對より絶對へ
生命の根元
靈智の源泉に
勢ひ至るべきである、
聖語法語も
その人たらねば知見はできぬ、

人よ自處して知識を燃やせ、
眞理の前にその大袈裟の前提を破棄せよ、
そは勇者である偉人である、
人よ眼醒よ
眼醒めて甲斐ある先天の
要素となれ機械となれ、
先天の犠牲となつて一切を捨て、
天眞から慾求するまゝの
創出といふ事業に熱狂して
身は生動する機械とならなければ

神の子は復活しない。

暗を透かして眼瞬けば

仄かに見ゆるは
高く高く空を飛揚する
白光燦たる羽根あるもの、
幻に映つるは
七つの色の數々の星、
羽根あるものは
寶珠の冠

綾羅の裳
素絹の袖の
いとも輕げにひら〳〵と舞ふ、
七つの色の數々の星は
羽根あるものを周つて
織りなす如く麗はしき
波紋をなしてくる〳〵と廻る、
舞ひながら
羽根あるものは歌ふ

廻りに廻れ

常暗の夜の根の國

照すは我ぞ

廻りながら七つの色の
數々の星はつれて歌ふ、
ほゝ笑みながら
苦の寶鏡を懸けつらねて
一つに他鏡の影を映し
そこより極みに至純の我を見
苦々は一苦に
一苦は苦々に
鏡々遠く或は近く
他の一切の色を寫して
一つに合せ一つに統べる、
見るまに波紋の中より
同じ白光明の羽根つけたるが
湧くが如くにゆるぎ出でゝ
生命舞ふかと見るまもなく
歡喜の光かゞやきの
聲も清らにもろ歌ふ

廻りに廻れ

七色の
七色の空の虹
離れば同じ一つの色

久遠よりせる靈智の光

靈智の光の照るところ
天地は同じ一つの色
廻るにつれて
何處よりともなく
微かに
しかも朗に
一切を洗ひ淨めるやうな
美妙な樂の音の傳はりて
あたりは言ひ知らぬ
芳しき薫に滿ちる、
と見る間に七色の
絢なす波紋も
羽根あるものも
いつしか一團の
光明の渦と變つて
唯くる〳〵と勢ひ廻る、

中央に立つて廻りながら
最初の羽根あるものは
歌ひつゞける、
白光明の渦卷は
たゞひたすらに
廻りながらこれに續く、
曉の
空の色
東の
野にかぎろへる空の色

色こそ溶けん朝の光
廻りに廻る一つの色
一つの色も廻ればやがて
光にとけむ靈智の光——

白光明の渦卷は
たゞ疾く廻る、
廻り得る
總ての力を盡して廻る、
萬牛の

吼ゆるがやうな音さへたてる、
廻る速度は濺り落つる
千仞の瀑よりなほ速い、
目にも留らぬ、
最初の羽根あるものも
いつしか渦巻く中に融け入つて
今は中央の一點とも見えぬ、
白光明に色もない、
渦巻の輪線もない、
透かせば透いて見える、

一切空、
總てが空、
唯僅に
極めて僅に
廻るものありと意識するのみ、
無限の旋廻である、
突如
すさまじい爆音のはたと止んで
さつと
閃くものゝありと見れば

あたりは急に
靜寂無邊、
刹那に
豁然として眼開けば
天地は朗然
絶對無礙、
光に融けたのである、
總てが光に融けたのである、
光である、
光明である、

眼を遮ぎる何物もない、
一切が光に輝く、
眼を基點として
内外總て光に滿ちる、
久遠の生命に入つたのである、
けおそろしき闇路を越して
長い永い惡夢から醒めて
始めて光をみたのである。

闇黒の

暗の帳を切つて落せば
世はさながらの光明世界、
切つて落すは自己である、
眼を開くも自己である、
切つて落すも落さぬも
眼を開くも開かぬも
總て自己を措いて外にはない、
人の世の明暗は
たゞ自己のみの問題である、
人の世の問題である、

人以外には何物もない、
これを他に求めてはならぬ。

認識は何處までも
主觀よりせる實在であらねばならぬ、
概念は何處までも
主觀よりせる實在に歸すべきである、
觀念の顯現は
常に自觀の上にのみ照る、
久遠よりせる靈智の光は

我神の子と笑みてかゞやく

もの靜やかな晩秋の
日の手の長い夕べなど
迷ふは同じ暗ながら
眼醒めがちなるわく子等は
當なく手びく
えせ親のさすらひに怖れて
やをら神のみまへにぬかづき
しづ心より祈りたく

深き冥想に耽りたく
いと敬虔な心にかへつて
神のみ門に立ちは立つが
哀れ天の扉は
永遠に開かない。

色硝子をもれて來る光線が
祈りの本の上に
七色の影を落す聖堂の
うすぐらい片隅にひざまづいて

長い白臘燭の焰ゆらぐ
祭壇を仰ぎ見ながらわゝ子等は
かつて
あゝかつて
まごゝろからの祈りを捧げた、
手首にかけたコンタツの
微かに玉の音してふるふ時
湧き起るやうな樂の音に
清らに唱ふ讃美の聲に
小さい魂は打ちふるへた、

地も山も
神のものなり
おゝわが主
神は王なり
いざわれら
拜みひれふし
あがめつゝ
ほめて歸らん

そは天國の幻

幻は幻
とことはに幻、
時は移る、
幻はうすれる、
妥協
放縦
委任
名利
快樂
肉慾

誤謬
恐怖
辨解
これ等異樣の觀光者は、
遠慮もなく會釋もなく
神園に居を搆へて
追へども去らない、
かつては燃えた信仰の
ほむらも哀れ消へ果てゝ
殘るは

聲なき幻の呵責である。

許したまへ
われめざめぬ
なみだと共に
われ罪を悔いぬ

放縱にあきて
束縛を求むる人の子が
急に親戀しふなつたやうに

一度消えた幻と
一度失つた信仰とを
回復しやうと
久方ぶりに
聖堂の扉を押してあわたゞしく
一隅にひざまづいてはみるが
一度疑惑にかきくもつた
幻は
再び見えない、
昔のやうな清純の

祈りは再び湧き出でぬ、
何とは知れず暗い影が
光にあへぐ蝶をはゞむ
ひやゝかな玻璃の戸のやうに
その默想を妨げる、
たゞしのばるゝはありし日の
神の子のやうな姿である、
おゝ神よ
そなたはありや
なしとせば

生くるもかひなく
ありとせば
死するもかひある
おぼつかぬ
心地はすれど
斯くの如きこと無限に續く。

神を心外にもとめてはならぬ、
光と暗とを
自己以外に取扱ふてはならぬ、

自己そのものが光であり
人の世そのものが光に
満ちなくてはならぬのである、
夫れ人の世の價値は
財貨の價値と同じやうに
人がその効用を認識して
これを尊重する程度によつて
異るのである、
眼醒めた自己は
絶對に住するが故に

行法の絶對權であり
護法の絶對値である
自己そのものゝ價値が
世を光に満ちさせるのである、
それが
人生重大事件の全部である。

蓋し絶對の上には
明暗の差別はない、
刹那の前には

明暗を分たぬ
明暗は相互の化身である、
相對である、
たゞ自己が光となり
人の世が光に滿ちるその時に
人は即ち刹那に入る、
人は即ち絶對に住する、
晝は晝のみ
夜は夜のみの境地に住め。

明暗は實に
この境地に至る道程である、
途は即ち
自己の睡眠から始まるのである、
光を求めて光を得るには
先づ自己一切の
暗を捨てゝかゝらねばならぬ、
なぜにか人は
愚にもつかぬに折角のことは
その實行に難澁する、

虚勢を徹せよ、
自慢を追へよ、
悪口を寒げよ、
無智を脱れよ、
懐疑を免せよ、
前提を壊てよ、
死力を盡して
暗の帳の一重を拂ひ
二重をかゝげ三重を排して
かくて始めて自己は煌く、

始めて無限の領土を見る、
心座は到るところにある、
境界は何處にもない、
たゞ愛と光の玉垣のなかで
階級定まるもろ〳〵の神が
苦の寶鏡のかゞやきの中に
無限の我を映してはほゝ笑み
たゞそのまゝに舞躍して居る、
たゞ見る莊嚴な
天才の群集が

大莊嚴の光に
喘ぐといふより外はない、
佛といはんか
神といはんか
眞といはんか
善といはんか
美といはんか
その眞と善と美とを押し進めた
究竟の言を以て其の名を呼ぶも
永遠に決して
過分といふことはない、
また腐れ岩に
苔むす心と呼ぶも
今に必ず不過分といふことはない、
がたゞ
官能と本能とを混同するものに
その名を呼ばれると刹那に
姿をかき消すのである。
哀れなるかな

末法の世の人の觀念は
神としいへば
白袖翩々たる御幣の如き、
佛といへば
胡座して眠る石地藏の如き、
翩々たるもの
有耶無耶なるものに
支配されて居る。

顯微鏡下の底無し世界を
飾る千種の色の配りも、
伽藍を飾る曼陀羅の華も、
みな本性にかはりはない、
みな本來の理性である、
無始より旅した
美意識である、
人はこの美意識を
刹那々々に擴大して
美しくかをる獨り子を
天なるみ國に生まねばならぬ、

勿論創出には苦は伴ふ、
けれどもかよはき乙女とて
陣痛に堪え得なかつた例しはない、
人は創造の苦に堪え得る、
人は創出の惱みに堪え得る。

神も佛も
完全調和の
莊嚴美の
法名に過ぎない、

美
おゝけだかき美よ、
創出に富んで常に若く
生動に力あつて永遠に老ひない、
果てなき世界に若やぎ生きる
美
おゝ美よ、
時は來た遂に來た、
神も佛もすでに老いた
かゞやく美の子を生み出す

相產の苦の時は來た、
苦しめ、
至美のみ國はこの苦の中から現出する、
勢ひ至れこの歡喜の世界へ、
機は何處にもある、
たゞ頓漸の二あるのみ、
自己の握るがまゝである、
夢より覺めて睡眠を醒ませ、
暗より出でゝ光を浴びよ、
光は永遠に笑みて輝く

人皆眠れる
夢の世界
東はしらめり我ぞ光

晴を透かして眼瞬けば
久遠よりせる靈智の光
われ神の子と笑みて輝く
光は永遠に笑みて輝く

大正十年八月一日印刷
大正十年九月一日發行

編輯發行者　岡田文次
印刷者　東京府下北豐島郡落合村落合五百九十二番地

印刷所　天華洋行大阪支店印刷部
大阪市東區北濱五丁目四十四番地

發行所　天華洋行
東京市京橋區南鞘町一丁目十番地

617
297

終